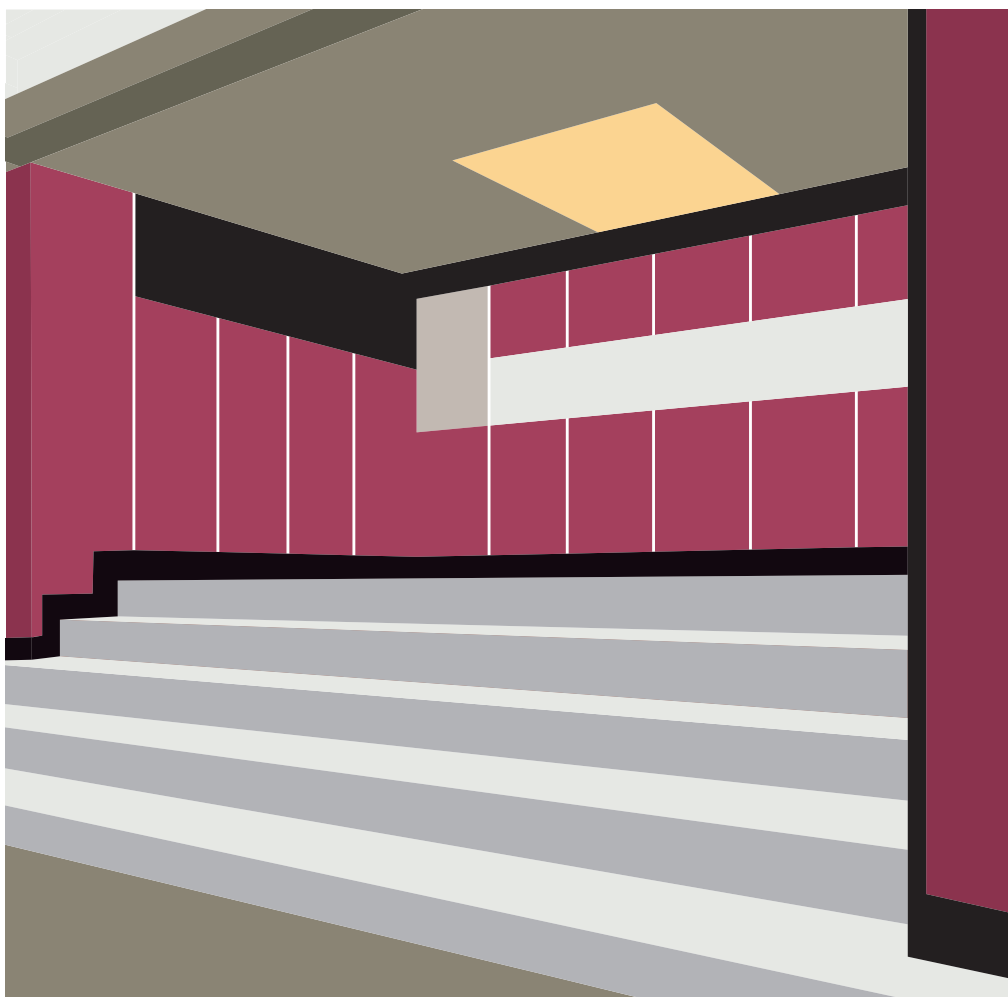


Atami und Bruno Taut

泉都熱海と
ブルーノ・タウト



熱海ブルーノ・タウト連盟



<ご利用法>

こちらはデジタル本(PDF形式)です。写真集のように読み進めてください。

ご興味のある方は、各ページの下部のQRコードや下線が付いている青文字のリンクから入ってください。詳しい内容が表示されます。

リンク先の記事は、適宜変更・修正されます。

*リンク記事利用期間 2024(令和6)年4月～2029(令和11)年3月末(予定)



発刊にあたって

日本で唯一現存するブルーノ・タウトの建築である重要文化財「旧日向家熱海別邸」は、熱海駅海側の丘「東山」の頂にあり、相模湾に浮かぶ初島を正面に佇んでいます。

1933（昭和8）年、タウトがナチスドイツを逃れて来日した頃、日向利兵衛は東山の土地を購入し、別邸建設を始めていました。その両者が出会い、受託、完成。そしてその直後、3年6カ月の滞在を終わらせて、タウトは離日しました。2年後の1939（昭和14）年に利兵衛は亡くなりましたが、幾度か恩恵を受け、解体の危機を逃れました。

別邸に関しての市民による支援活動（タウト会や旧日向別邸保存会）は、熱海市が別邸を取得し初公開された2004（平成16）年以前より行われてきましたが、高齢化などの理由から、有名無実となっていました。その後別邸は、工事期間3年、建設費用3億円の改修工事が行われることになり、これを機に有志が再結集しました。観光振興と広報支援を目的に「熱海ブルーノ・タウト連盟」を結成し、「タウト塾@熱海」を軸に活動してきました。2022（令和4）年8月、大改修を終えた別邸は再公開となり、現在に至っています。

当連盟は、2021～2023（令和3～5）年の3年間、旧日向家熱海別邸を通してブルーノ・タウトの思想・作品・彼の生きた時代に触れ、また熱海の歴史や観光振興を学んできました。本書は、この間の活動・学習の記録をまとめたものです。御高覧いただければ幸いです。なお、今年度をもって連盟は解散いたしますが、これまで多くの皆様からご教示、ご支援をいただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

2024（令和6）年3月 吉日

熱海ブルーノ・タウト連盟会長 矢崎英夫



本書ご利用法



変更便覧



目次

▪ 発刊にあたって	熱海ブルーノ・タウト連盟会長 矢崎英夫	3
-----------	---------------------	---

▪ 熱海温泉の歴史

熱海温泉来由	8
大湯間歇泉	9
少彦名命	10
湯治場の形成	11
御汲湯 温泉宅配	12
温泉番付 人気の熱海温泉	13
諭瀛館(きゅうきかん)	14
熱海梅園	15
今井半太夫 熱海歴代の貢献者	16
熱海御用邸	17
鉄道交通の変遷	18
丹那トンネル開通	19
「泉都熱海けふぞ市位を名乗る」	20

▪ 別荘ものがたり

分譲地開発	22
熱海の別荘 I	23
熱海の別荘 II	24

▪ 東山地区の誕生

駅前東山地区の誕生	26
東山トリオ	27
東山トリオ I 東山荘	28
東山トリオ II ATAMI海峯楼	29
東山トリオ III 旧日向家熱海別邸	30



■ ブルー・ノタウト

ブルーノ・タウト I	32
ブルーノ・タウト II 来日	33
ブルーノ・タウト III 高崎市達磨寺	34
ブルーノ・タウト IV 多賀村	35

■ 旧日向家熱海別邸

詳説	38
タウトの日記でたどる	50

■ 竣工後の旧日向家熱海別邸

3+1の恩恵	70
docomomo100選／重要文化財指定	71
令和改修工事	72
「緑の党」に引き継がれたタウトの理念	74
ブルーノタウトの軌跡展・特別講座	75
ドイツ大使 来熱	76

■ 資料

タウトの著書 『日本の家屋と生活』	78
タウトの著書 『日本美の再発見』	79
活動の記録	80

■ おわりに

お茶の水女子大学 名誉教授 田中辰明	82
--------------------	----

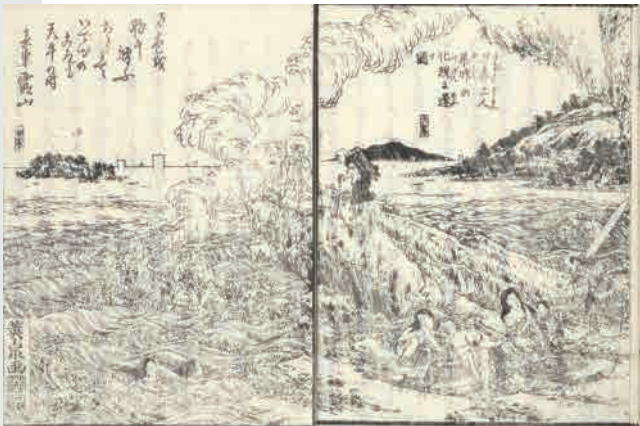
熱海温泉の歴史



熱海温泉来由

熱海は温泉のまち。ここでは、不便な交通を克服しつつ栄えてきました。熱海に数ある温泉源の中でも伊豆山の「走り湯」と熱海の「大湯」は熱海温泉の代表で、ユニークな物語と共に歩んでいます。

「熱海温泉図彙（あたまおんせんずい）」の一説に「熱海温泉来由」があり、熱海温泉の古代から江戸までの温泉誌が綴られています。この書は1832(天保3)年に刊行され、熱海温泉の誕生、熱海七湯などが絵付で紹介されています。



「万巻聖人薬師の化現と逢図」



熱海温泉来由「万巻聖人薬師の化現と逢図」では、奈良時代、箱根の万巻上人は、海中に沸く熱湯によって魚が死んでしまい甚大な被害を被っているとの漁民たちの訴えを聞き、現地を訪れ、祈願により泉脈を海中から山里へ移し、「この前に社を建てて拝めば、現世も病を治す、来世も幸せに暮らせる」と人々に説きました。この源泉が現在の「大湯」であり、そのお社が、「湯前権現(現在の湯前神社)」であるといわれています。



熱海温泉図彙



大湯間敷泉
湯前神社
少彦名命

大湯間歇泉



大湯の絵図

大湯間歇泉は、昼夜で6回自噴して湯と蒸気を交互に激しい勢いで吹き出し、地面が揺れるようであったといわれています。

中世の禅僧・中巖円月（ちゅうがんえんげつ）の漢詩の一節には「夜半に夢から覚めると琅琅と響いてくる、それこそは岩根から熱湯の湧き出づる音、たくさんの笕（かけい）で伝え分けた湯から立ち上る湯煙が家屋を取り巻き、家々に浴室を備え、客が房室を借りて宿っている」と述べられています。



湯前神社



大湯間歇泉



熱海・名の由来



すくなひこなのみこと

少彦名命

日本各地に温泉を祀る湯前神社がありますが、熱海の湯前神社は、大湯間欠泉を「病を除く効果がある温泉がある」との神様からのお告げから、「少彦名命」を祀りました。

現在、市では湧出する温泉に感謝し、泉脈が絶えないようにと春と秋に例大祭を開催し、湯汲道中パレードなどの行事が奥ゆかしく行われています。



少彦名命は、玉造温泉、道後温泉、箱根の元湯温泉の発見者です。温泉の神様として人気です。この神様は小さく、腕白で、間違って天より地上に現れ、多くの施しをしています。

大国主命と行動を共にし、国づくりをし、健康、医療、産業、商売などの神格を有しています。

そこからお椀の舟に乗って川を下る一寸法師の話が生み出されたと言われています。





湯治場の形成



豆州熱海絵図 1681(天和元)年*

古きより大湯を中心に発展してきた熱海は、相模湾に浮かぶ初島を視点とした湯治場として、戦国時代より徐々に町としての形を成してきました。

大湯を祀る湯前神社を起点として、初島に向けて本道町通りがつくられ湯宿が形成され、江戸時代にみられる熱海温泉町の景観が構成されました。



本道町通りには二階建ての湯戸建築が軒を連ね、熱海村中心部の景観を大きく特徴付けています。これらは二階座敷からの眺望を重視しているのが特徴で、海や初島の眺めを大切にしています。

*近世の熱海温泉を描いた現存する最古の地図と言われている。

**旧日向家熱海別邸を設計した渡辺仁も、建物の配置を初島を正面においた。相模湾に浮かぶ初島の力がうかがえる。





御汲湯 温泉宅配

徳川家康は熱海の温泉と効能を気に入り、関ヶ原の合戦の前にも入湯し天下統一を成し遂げたといわれています。また、病氣療養中だった吉川廣家に熱海の温泉5桶を見舞いとして京都まで届けさせました。以後御汲湯は、三代将軍徳川家光、四代将軍家綱と長きにわたって続きます。その際には江戸から御汲湯奉行が派遣され、厳重な監督のもとで熱海の湯が汲み出されました。

御汲湯が行われたのは大湯で、御用は「湯戸」の主人に限られ、7つの作法に従い厳格に行われていました。十代将軍家治も熱海の湯を所望、2年間に229樽の湯が江戸城まで運ばれています。



■ 江崎孝坪画「御汲湯図」昭和期（古屋旅館蔵）

将軍への献上を機に、江戸の四日市川岸通りに熱海温泉出張所をつくり、湯そのものを売り出しました。今でいう「宅配温泉」です。「ゆっくり温泉に入りたいが出かける暇はない」という江戸っ子の人気を呼びました。12の効能を持ち、一日中入っても150文で、家への小売りもし、このおかげで料亭では年中無休で営業するほどであったといえます。



将軍への温泉献上
御汲湯と熱海温泉

温泉番付 人気の熱海温泉



相撲の「江戸番附」が初めて発行されたのは、1757(宝暦7)年10月場所でした。江戸から明治にかけて、相撲の番付にならった「温泉番付」が江戸や京都、有名温泉地につくられました。

江戸時代、将軍の信頼を得た熱海は、一貫して温泉番付での行司を務めています。見る人を納得、権威づけるには行司、勧進元、差添が認める名湯、別格な温泉地でなければならない。徳川家康愛顧の温泉地で、将軍への御汲湯も行ってきた熱海湯はその条件を十分備えていました。



■ 「諸国温泉鑑・三蔦屋版」

■ 大湯温泉地区の衰退 ■

人気の熱海温泉を支え続けてきた江戸時代も、明治の世となり、新政府関係者や内務省・宮内省などの支援を背景に、江戸時代までの「湯治場」から「保養地」へと再編され、利用の方向が大きく変化していきました。

大湯利用の支配者的集団であった「湯戸」特権が解体されていったことや、肝心な大湯や他の泉源の湧出量が減少し続けたことも原因しました。

そんな事から、古く開発しつくされ手狭になった大湯温泉地区から、交通の便が良く開発余地のある現在の熱海駅前温泉地区へと、その中心が広がることとなっていきました。





噓氣館(きゅうきかん)

明治政府による「湯治場」から「保養地」への再編は、1885(明治18)年熱海温泉を療養に使うことを目的にした施設「噓氣館」の建設となりました。

これは、岩倉具視の強い意見の下で計画され完成したもので、ドイツなど西欧各国を視察して造られました。明治政府の肝いりで建設されたこの施設は、日本初の温泉医学の療法によるものです。西洋の保養地に基づいて、翌1886(明治19)年には屋外運動・保養公園として「熱海梅園」が整備され、画期的な両施設となりました。

噓氣館は人浴施設だけではなく、大湯の間欠泉の蒸気を使い、肺病患者への吸入療法による温泉療養施設として運営されていました。そのためにドイツから機器を導入し、室内温泉蒸気室、大湯温泉蒸気吸入器を使つての治療が行われました。



(今井写真館蔵)

また保養の目的の為に、療養に加えて、遊泳場やビリヤード場が併設されました。しかし画期的なこうした施設は、噓氣館以降、造られることはありませんでした。





今井半太夫 熱海歴代の貢献者

江戸時代の熱海温泉を語る上では、代々にわたる名主・今井半太夫を外すことはできません。江戸時代より卓越したリーダーシップを発揮して、熱海に貢献し続けてきました。歴代を通して村人の窮状を救い、時として熱海温泉の新しい産業を開発し、誇りある観光地、保養地へと貢献してきました。

明治時代に入り、政府の要請「唵瀧館建設への協力」を受けた半太夫は、代々の一等地である大湯の土地と、大湯間欠泉の権利を政府に委譲しました。そして完成後には「温泉取締所」の運営を担い、温泉宿の浴客から徴収した温泉料で、温泉場の整備や改善、衛生管理などを行ないました。

しかし、政府の肝いりでこの療養施設は、一時隆盛を極めたものの、大湯間欠泉湯量の減少と利用者の減少から、1891（明治24）年に温泉業者に払い下げられる事態となりました。その後、唵瀧館は1920（大正9）年に焼失してしまい、一貫して関わってきた今井半太夫の名は以後表に出ることありませんでした。



天保元年 今井半太夫の湯店と一碧楼





熱海御用邸



1889(明治22)年6月、大正天皇の療養のための「熱海御用邸」が竣工しました。喻瀨館、熱海梅園に引き続いて大湯・喻瀨館に程近い場所で、岩崎彌太郎より土地を献納されてのものでした。ここには大湯の温泉がひかれました。



＊熱海御用邸の場所は
現在、熱海市役所となっている。



熱海御用邸



鉄道交通の変遷

熱海は、江戸時代より家康に愛された温泉地。江戸から近距離であることから、全国の温泉地の中でも別格な人気の場所でした。とはいっても難は交通で、長きにわたり多くの人々が様々な手段を取り入れてきました。

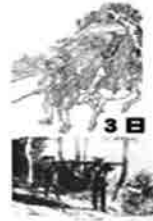
人力車、人力鉄道、軽便鉄道と変遷しましたが、1923(大正12)年9月の関東大震災により軽便鉄道が壊滅し、この熱海線は壊滅し全廃しました。

震災から一年半後の1925(大正14)年、国府津から熱海をつなぐ熱海線が開通し、熱海駅が完成しました。開業は多くの人々に喜ばれ、大変な賑いであったようです。



そして1934(昭和9)年、丹那トンネルの開通で東海道線がつながりました。

戦後1964(昭和39)年の新幹線の開通で、今では交通便利な状況となっています。



江戸から熱海まで

歩いて
3日



人力車
1.5日



人力鉄道
9時間



軽便鉄道
5時間



熱海線
3.5時間



東海道本線
2.5時間



新幹線
50分



熱海の交通
発展史



熱海駅開業



丹那トンネル開通

御殿場を経由していた東海道本線（御殿場線）ですが、箱根の山越えは勾配がきつく、輸送に大きな障害がありました。熱海線開通により、勾配が80%小さくなり、距離も20%短縮することが出来ました。このことにより、熱海から函南間を開通させる丹那トンネル工事が決められました。

丹那トンネルは、1918(大正7)年に着工し、1934(昭和9)年までの16年間で費やして貫通しました。多量の高圧湧水、温泉余土、断層などのために難渋し、工事費も約3.6倍にも膨らみました。工事中の犠牲者は67人、携わった総延べ人数は250万人となりました。



丹那トンネル開通により、多くの恩恵を受けることとなります。1925(大正14)年、熱海線の乗客数は28.7万人でしたが、東海道本線開通の1935(昭和10)年には、191万人を数えることとなり、多くの観光客が来熱しました。

また、湧き出す水のために難工事となった丹那トンネルでしたが、丹那湧水のおかげで、熱海の水不足が解消されることになりました。





「泉都熱海 けふぞ市位を名乗る」

1937(昭和12)年、熱海町と多賀村の合併により、市制が施行されました。丹那トンネル開通によってもたらされた経済的發展を基に、温泉観光都市建設をめざして熱海に市の制定をとの願ひから実現しました。



昭和12年4月10日 ～朝日新聞号外～
熱海市誕生の合図を知らせる花火が打ち上げられた。

1957(昭和32)年には、網代町とも合併し、現在の熱海市となりました。
2017(平成29)年、市制施行80周年を記念し、『熱海温泉誌』が刊行されました。



泉都熱海
けふぞ市位を名乗る



熱海温泉誌

別荘ものがたり



分譲地開発

丹那トンネル開通から、熱海の温泉付き分譲地が開発されていきました。駅前地区の開発に並行し、来宮神社が位置する西山、桃山、野中地区(現咲見町)、水口付近、伊豆山地区に留まることなくさらなる周辺へと広がり、町全体の開発が進んでいきました。



『熱海温泉 理想郷 桃山案内』(熱海市立図書館 蔵)より

駅前温泉地区の開発のきっかけは熱海駅に隣接する東山・桃山地区でした。1921(大正10)年、東京に本拠をおく竹内同族会社が東山・桃山のこの地区の土地分譲を開始し、これを機に各地の開発へと急激な進展となりました。



熱海に別荘が建ち始めたのは、1887年(明治20年)頃からと言われています。政治家、豪商、華族といった人々が持ち主でした。

「熱海市史年表」によれば、その後1917(大正6)年に50軒だった別荘は、1928年(昭和3年)には106軒、1935年(昭和10年)には530軒に増加しています。

ここでは、戦前に建てられて、現在市内で公開されている別荘をご紹介します。



熱海桃山・
潮見台文化別荘分譲地



旧日向別邸の温泉



熱海の別荘 I

■ 雙柿舎 ■

1920(大正9)年、現在の水口町に、坪内逍遙は自身の設計によって母屋を建てました。当時300坪のこの傾斜地に、柿の老木が2本あったことから、逍遙は「雙柿舎」と命名しました。1928(昭和3)年には、最も特徴のある逍遙書屋を敷地内に建てました。和洋漢を折衷した建物で、塔の上にはシェークスピアの句から翡翠(かわせみ)と橄欖(かんらん)の葉の風見を掲げています。



坪内 逍遙

1859(安政6)年—1935(昭和10)年
小説家・評論家・翻訳家・脚本家



■ 凌寒荘 ■

この屋敷は、1937(昭和12)年に、三菱鉱業常務の西原民平によって西山に建てられました。この西原が佐佐木信綱の主宰する短歌結社「心の花」の同人であった関係から、信綱はこの別荘を譲り受け、1944(昭和19)年から居住しました。「凌寒荘」と名付けたのは、中国の詩人王安石の「寒さを凌いで独り自ら開く」という詩句にちなみます。万葉学者でもあった信綱は、『万葉集』に詠まれた草木を三十種以上育てたこの庭を、こよなく愛しました。



佐佐木 信綱

1872(明治5)年—1963(昭和38)年
歌人・国文学者



雙柿舎



凌寒荘



熱海の別荘Ⅱ

■ 中山晋平記念館 ■



今日、熱海市の梅園の中に移築されている建物は、「中山晋平記念館」と呼ばれています。1935（昭和10）年に作曲家中山晋平によって建てられ別荘は、西山の「凌寒荘」の裏手にありました。1944（昭和19）年、戦局の悪化に伴って晋平は熱海に移住し、自宅としました。当時、作曲はせず畑仕事をしていました。その後1952（昭和27）年、国立熱海病院で亡くなる時、「あの町この町」を口ずさんでいたと言われています。



中山 晋平

1887（明治20）年—1952（昭和27）年
大正・昭和期の流行歌・童謡・新民謡の作曲家

■ 起雲閣 ■



現在の「起雲閣」は、最初の所有者内田信也の「内田別邸」として1919（大正8）年に完成しました。その後1925（大正14）年、2番目の持ち主根津嘉一郎の手に渡り、「根津熱海別邸」となります。根津は、東武鉄道グループの創業者として知られています。3番目の所有者は桜井兵五郎で、内田信也と同時代を生きた人です。両者は、実業家で政治家でもありました。

1947（昭和22）年に、桜井は根津熱海別邸を購入後、旅館「起雲閣」を開業しました。起雲閣には、山本有三、志賀直哉、谷崎潤一郎、太宰治など、多くの文学者が投宿しました。



中山晋平記念館



起雲閣

東山地区の誕生



駅前東山地区の誕生

熱海駅周辺地区開発の先駆けは、熱海駅に隣接し東海道線で分断する2つの地区です。海側の東山と山側の桃山で、共に景観に優れた温泉分譲地です。

東山は相模湾に接する最高の景観をもった地ですが、面積が狭く限定されており、それ故に貴重で人気でした。

一方桃山は、直接海に接していませんが、面積が広く標高もあることから人気でした。

現在の東山全景です。海拔約90mで、駅より約20mの高台になっています。135号線、駅前道路に囲まれた丘となっており、昭和の建物が複数存在し、昭和の浪漫をかもしだしています。





東山トリオ

頂には3つの施設が隣接しており、「東山トリオ」を構成しています。

時代がからみ、タウトが絡んだこの3施設を称して、連盟では「東山トリオ」と呼び、熱海の歴史的重点地区の一つとして注目しました。



▪ **アタミ海峯楼**
隈研吾設計 (宿泊施設)

▪ **東山荘**
(国登録有形文化財)

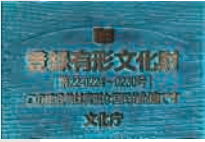
▪ **旧日向家熱海別邸**
ブルーノ・タウト設計 (国重要文化財)



「東山トリオ」



東山荘



東山荘は、設計施工・清水組 敷地面積1000坪で、相模湾を望む敷地北東寄りに本館が位置しています。1933(昭和8)年、第一銀行頭取であった石井健吾氏の別邸として建築されました。戦前期における熱海の別荘開発と、代表的な別荘建築が集中する貴重な歴史的地区の開発の始まりの時代でした。

その後、所有者が山下汽船(現・商船三井)の創業者山下亀三郎氏に移り、1944(昭和19)年に世界救世教が譲り受けました。

2016(平成28)年に、昭和初期から今日までの歴史を孕んだ近代和風の別荘建築として貴重であると評価され、国の登録有形文化財(建造物)に指定されています。



国登録有形文化財
東山荘



ATAMI 海峯楼

1995(平成7)年3月、タウトを敬愛する隈研吾氏により旧日向別邸に隣接してゲームメーカーのゲストハウス「海峯楼」が建設されました。現在は、旅館「ATAMI 海峯楼」として営業されています。



私のこの「水／ガラス」という作品の敷地は、タウトの設計した「日向別邸」の隣でした。タウトの作品が熱海にあることも知らなくて、この建物の設計を依頼されて隣に建っていることを知ったときにはたいへん驚いた。ここでも僕は、せっかくタウトの隣なんだから縁側をやろうと思ったんですね。それも水の縁側をつくろうと考えた。

(東西アスファルト事業協同組合講演会 物質性とサイバースペースより)

隈 研吾

1954年生 東京大学建築学科大学院修士

コロンビア大学客員研究員を経て1990(平成2)年限研吾建築都市設計事務所設立
現在、東京大学特別教授

隈氏の父親が気に入って所有し自慢していた小箱は、タウトがデザインしたもの(銀座ミラテスで購入した)でした。タウトが設計した旧日向別邸に隣接する海峯楼の設計、そして銀座ミラテスに隣接するホテルの設計など、隈氏とタウトは、不思議な縁を持っています。



ATAMI 海峯楼



熱海・近辺の
隈研吾氏の建築



旧日向家熱海別邸



東山荘本館が出来上がった1933(昭和8)年、日向利兵衛は隣接する土地を尾崎洵盛男爵より譲り受け、別邸上屋の設計を渡辺仁に依頼して建設に入り、完成させました。(1期)



その後、清水組によって、引き続き行われた基礎部(離れ・地下室)とその屋上庭園の建設が行われました。(2期)



この基礎部の躯体を使っでの改築がブルーノ・タウトによって行われました。(3期)

この施設を有名にしたのは、表現主義の代表でもあるブルーノ・タウトが、日本に残した唯一の建築物であることに起因します。

ブルーノ・タウト



画：月岡貞夫



ブルーノ・タウト I



ドイツの建築家。1980年ケーニヒスベルクにて誕生。1914年ケルンのドイツ工作連盟展で設計した「ガラスの家」によって一躍有名となり、マクデブルク市の建築土木課長となり、色彩建築を試みて注目された。

1924年ベルリンに帰り、1万2000戸にのぼる集合住宅であるジードルングを設計した。ベルリンのシャルロテンブルク工科大学教授。表現主義の代表とされる。

1933年シベリアを経て来日。日本の建築と美術に深い理解を示し、仙台・高崎などで工芸を指導した。京都の桂離宮に近代建築に通じる美があることを説いて、日本の建築家に大きな影響を与えた。

1936年トルコのイスタンブール芸術大学教授となり、離日した。

1938年イスタンブールにて58歳で逝去。

世界遺産

■ モダニズム集合住宅群 ■

ベルリンにある6つの集合住宅(ジードルング)が、2008年世界遺産登録になりました。そのうちの4つがブルーノ・タウトの設計によるものですが、特に馬蹄形ジードルングが有名です。当時の低所得者層の生活環境改善が背景にありました。

現在、世界遺産でありながらも今なお人が居住していることも特徴的です。



[ジードルング](#)



[タウトの建築](#)



ブルーノ・タウト II

■ 来日 ■

タウトは、1933年ソビエトを経て、福井県敦賀港に入港しました。

初めて見た日本の印象を、日記に記しています。

1933年5月11日

昼、遥かに日本の海岸を望み見る。やや近づくと緑の山々。これまで見てきた景色とはまるで違った新しい国土だ。雨、なにもかも灰色に被われている。やがてまた緑の陸地が見え、前方には湾、そのうしろの明るい空、松の生えた島々、間もなく入港である。

多彩な色、緑、なんという景色だろう、かつて見たことのない美しさだ。虹のように輝く水、まったく新しい世界である。敦賀湾、赤と白の閃光を放つ二基の燈台。敦賀の街が低く見える。その前方には村落、一面の銀鼠色、ところどころに輝くばかりの白。

日本インターナショナル建築会に招待されて来日した翌日、タウトは53歳の誕生日祝いに桂離宮を訪れ、多くの影響を受けることになります。



1933年5月3日タウトが来航した天草丸



左から エリカ タウト 上野伊三郎



■ 銀座「ミラテス」 ■

タウトは、日本滞在中のことを自分自身で「建築家の休日」と言っています。しかしながら、意欲的に日本の工芸品の開発に取り組みました。

特に、素材としての竹をこよなく愛し、様々な工芸品を生み出しています。それらの工芸品を販売していたのが銀座「ミラテス」です。



タウトの来日



日本インター
ナショナル
建築会



桂離宮



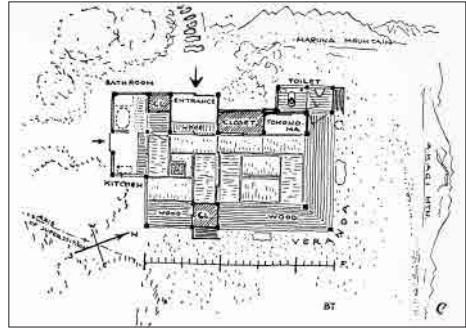
隈研吾
銀座ミラテス他



ブルーノ・タウトⅢ

■ 高崎市「達磨寺」滞在 ■

ブルーノ・タウトはエリカと共に来日し、井上房一郎の紹介で1935(昭和9)年8月1日から1936(昭和11)年10月8日までの2年3か月を、ここ高崎市達磨寺「洗心亭」を拠点にして活動しました。6畳と4畳半の二間だけのつくりでしたが、展望もよく、こよなく愛した母国にあるコリーンの地とも共通することから、深い愛着をもって住みました。地域の人々にタウトさんと呼ばれて交流しつつ、活動しました。



ブルーノ・タウトと高崎



洗心亭
大使館ユーチューブ



ブルーノ・タウトⅣ

■ 多賀村(現・熱海市) 滞在 ■

ブルーノ・タウトは、熱海市春日町に熱海の家(旧日向別邸)の地下部分を設計・監理の為に、1935(昭和10)年、1936(昭和11)年の2度にわたって熱海に滞在しています。日向利兵衛は、工事を監督するタウト夫妻のために、上多賀の民家を借りて泊まれるようにしました。

1935(昭和10)年7月21日 上多賀にて

私達の借りた上多賀の家は静かな入江に臨んでいる。日向氏もつい近くに仮住居していて、夏の別荘にする為に山中の農家をここに移築中である。近所は漁師や農民の家ばかりだ。上多賀は、突堤のある小漁港で、海水浴場はここから十分ばかり先きの入江である。



1935(昭和10)年7月26日 上多賀にて

いま日向氏は、避暑用の別荘にする為に農家を移築しているが、こういう趣味はとかく近來の流行らしい。ともあれ大工達が切込である用材を巧みに組立てていく様を眺めているのはなかなか楽しいものだ。それにしてもまた随分むづかしい仕事だと思ふ。巨大な梁は、まるでそれだけが宙に横たわっているような印象を与える、中央部に太い柱が2、3本あるきりで、外方の柱などはマッチの軸のように細い。とにかく古い家屋を移築する過程は、そばで見ているだけでも、面白いものだ。それにまたここで働いている大工さんは、みなひどく気のいい人達ばかりである。

1935(昭和10)年7月27日 上多賀にて

日向氏の移築家屋の上棟式が行われた。棟の上には、青竹に弦を張り矢を番(つが)えた大きな弓矢の飾物を仕立て、傍らに神道の御幣が立ててある。その下で大工や鶯(とび)職が酒を飲み、歌ったり踊ったりするのである。



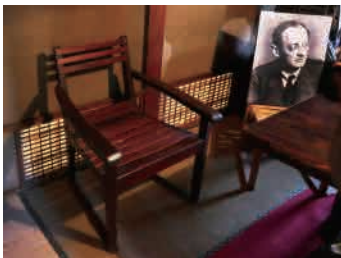


ブルーノ・タウトⅣ

1935(昭和10)年8月4日 上多賀にて

『日本の家屋』の第3章『夏』を昨日脱稿、今日から第4章の『太陽と炭火』を書き始めた。そんなわけでこの数日はゆっくり自然を「楽しむ」暇が無かった。それにまた戸外はひどく暑いのだ。だから午後遅くなって、陽がすっかり傾いてから、水浴みをすることにした。

私は日本に来てからというものは、すっかり「休暇中の建築家」になってしまった。



1935(昭和10)年8月7日 上多賀にて

日本語の「建築」という言葉は「建」が垂直に立てること、「築」が水平に築くことを意味する。すると、「建築家」は、構造家という方が当たっているようだ。また主たる大工は「棟梁」と呼ばれているが、これは「棟木」と「梁」の意である。だから大工という語より具象的だ。

いま多賀の大工に頼んで、椅子と重いテーブルとを松材で造らせている。もともとここに滞在している間だけの使用に供するつもりであるが、日向氏は私達が多賀を引上げる際には、これを自分に譲ってほしいと言っている。例の田舎家の広間に使いたいのだそうである。私も近頃は、家具の設計ばかりを職とするようになった。本来の建築から離れて、もう3年余りを無為に過している。

*日向氏が移築した家屋は、現在「多賀そば」として営業しており、タウトから譲りうけたテーブルと椅子も置かれている。

見学の場合は、前もって連絡してください。





旧日向家熱海別邸

（詳説）



概要

■ 旧日向家熱海別邸施設概要 ■

所在地	熱海市春日町8-37(1712番地7)		
敷地面積	702.38㎡(実測648.26㎡)		
敷地形状	相模湾を展望した南傾斜地		
構造	上屋	木造銅版葺き2階建て	
	地下	鉄筋コンクリート造1階(上部屋上庭園)	
建築年月	上屋	1935(昭和10)年2月	
	地下	1937(昭和12)年	
延床面積	上屋	1階 146.38㎡	2階 58.67㎡ 計205.05㎡ (約62.0坪)
	地下	129.89㎡ (約39.3坪)	
	合計	334.94㎡ (約101.3坪)	

旧日向別邸 と タウトの在日																																										
和暦	昭和8年												昭和9年												昭和10年												昭和11年					
西暦	1933												1934												1935												1936					
月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
日向別邸工事																																										
一期工事																																										
二期工事																																										
三期工事																																										
タウト在日																																										

建築家・ブルーノ・タウトが1933(昭和8)年5月、敦賀に入航した頃、日向利兵衛は、熱海東山の相模湾を望む一角を取得し、渡辺仁に上屋の設計を依頼しました。約1年半後、上屋が完成し土留め躯体も完成、丹那トンネルが開通した直後の時期の1935(昭和10)年4月、日向利兵衛はタウトに地下の設計を依頼します。

別邸は、2人の建築家とその仲間たちにより、3期の工事から完成しました。





立地



熱海駅海側の東山地区の丘の頂上は海拔90m程の場所。その平坦地より約5m程下り場所を平坦にした場所に、日向別邸が相模湾を眼下にし建っています。



建設位置地図・鳥瞰



眺望



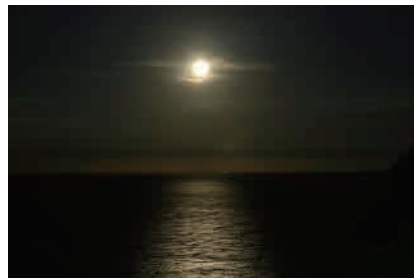
■ 初島を正面配置された日向邸 ■

上屋建物は本来の敷地計画に沿いながらもやや南へ傾けて配置されています。これは採光面を考慮すると同時に、正面に初島を望む景観を意識して客間の向きを初島に向けたと推測されます。

南面に広がる相模湾からの朝日、そして月が奏でる景色は、四季を通じて美しくドラマチックです。タウトは、桂離宮の月見台を心に映し、様々なデザインで地下室を魔不思議な世界へと造りこんでいます。



朝日



月光

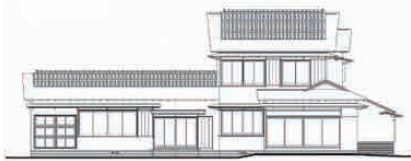


日の出、月の道
桂離宮月見台

一期工事 上屋のこと



上屋



南立面図(姿図)



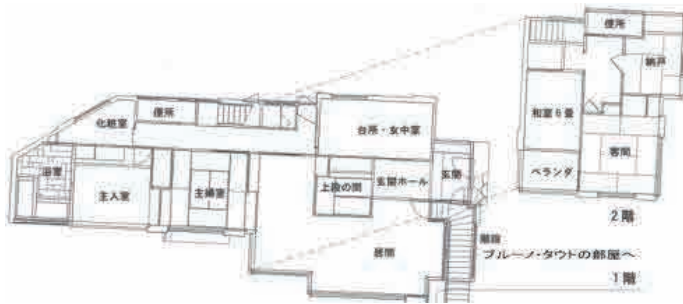
東立面図



断面図



竣工時の外観



ベランダからみる相模湾・初島・大島



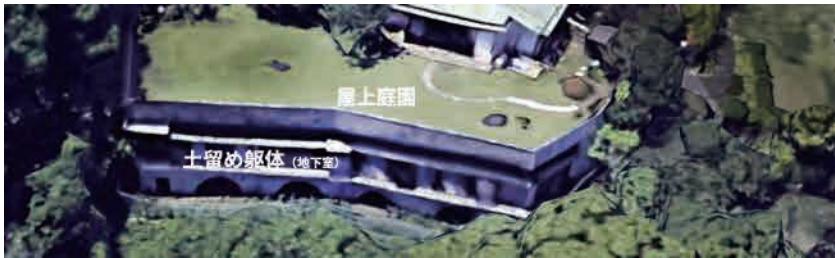
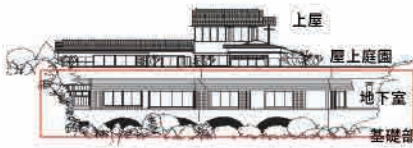
[上屋\(母屋\)の建築ガイド](#)
(全体の建築はこちら)



二期工事 躯体・屋上庭園のこと



上屋の創建時敷地推定図(配置)



1933(昭和8)年に土地取得し、上屋の工事が進む中で日向は予定にはない屋上庭園を要望しました。そうしたことから庭園設置の為の土留めの設計が上屋の工事と重なって行われ、設計から4ヶ月後の1934(昭和9)年10月工事完了。土留めといっても部屋をもち、風洞などを設け湿気対策をし、その後の利用が図られました。

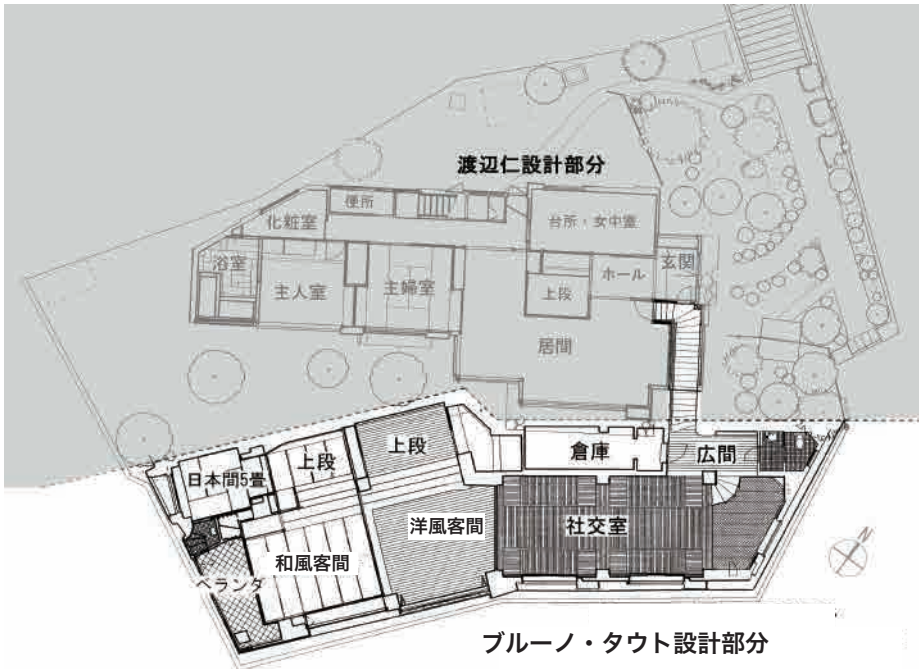


屋上庭園



タウトの躯体変更

三期工事 地下室のこと



日向は、屋上庭園をつくる為に、すでにできあがっていた渡辺仁による上屋の一部に手を加え、地下室への階段を造り、急傾斜の土留めのための地下室をつくっていました。目的を持たないその地下室の室内設計を、タウトは受託し造りあげました。

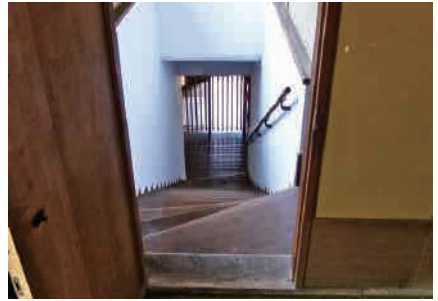


旧日向家別邸
建築ガイド
(全体の建築はこちら)



地下室へ

1階の居間から「幻の地下室」とも言われる地下空間への階段です。タウトは90cmの階段幅を120cmに造り変え、真竹の手すりを付けています。居間からの利用と同時に、玄関土間に扉を設け、居間を通らずに地下室が利用できるように配慮されました。



地下室に至るまでの間に踊り場である「広間」が設けられました。地下室から85cmほどの高さになっています。視線を変える為に、階段の下部2枚には角度がつけられ、周り階段への流れを作っています。



社交室の東側にアルコーブがあります。各種の竹が多用されていることから、「竹の間」とも呼ばれています。天井を30cm程低くし、檜の床材を細かい矢筈張りとし、社交室の大柄な縁甲張りと区別されています。壁は白竹のトクサ張、そして天井を桐の小幅板張りとするなど、全体を繊細なつくりとし、親しみやすく落ち着いた雰囲気としています。照明は、社交室の吊り照明が末広がりにも吊られました。



幻の地下室へ



廻り階段



竹の間 (アルコーブ)



社交室



社交室は、一番大きな部屋で、多くのデザインが施され、摩訶不思議なる空間となっています。

山側の壁は、レモンイエローの漆喰壁で、チーク材で分割され、腰は桐のベニヤ板でアールデコ調のデザインで貼られていて、桐の小幅板が細かくデザインされた天井と連携しています。



社交室の特徴の一つである吊り照明は、電線を入れた煤竹を横にして天井から吊るし、そこから細い黒竹の鎖でコードを隠したペンダントです。また105個あるペンダントの高さは全て異なることから、訪れる人々の興味をそそっています。



壁に沿っておかれた椅子はタウトがデザインした木製のスタッキングチェアで、ベニヤ板で軽く作られ、移動しやすく積み重ねられます。



社交室



旧日向別邸の家具



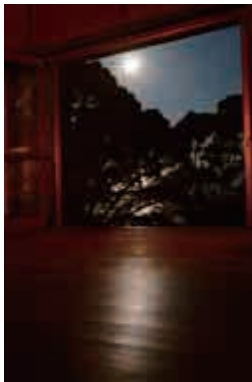
洋風客間

洋間客間を特徴づけるこの真紅色は、タウトが好んで使用しています。この壁紙は高崎の名産である絹織物を使い、母国ドイツよりこの無機質塗料を取り寄せて染めたものです。上段への階段状の段は相模湾を展望する家具として作られました。5段からなる高低差から海を眺める為のベンチとなっています。蹴上の高さ、踏面の寸法が異なり、段板の先端には仕掛けがほどこされています。



海側の開口部の窓は掃き出しの折り戸になっており、窓幅一杯に開放します。床はチーク材が漆塗装され、外部の太陽光、月光が映しこみます。

タウトが来日直後訪れ絶賛した桂離宮の月見台のイメージが彷彿とされます。





和風客間



和風客間は12畳で4.5畳の上段付きです。タウトによるこの日本間は伝統に反する表現が幾つかあります。一つ目は、畳を十文字に交叉して敷くという「不祝儀敷き」で縁起がわるいとされています。二つ目は、床の間の落し掛を上げずに鴨居と同じ高さで作られていることです。



三つ目は、床の間に向けて畳の縁をぶつけるという「床差し」です。床の間は和室において大切な場、聖なる場です。その真ん中に線で差すことは日本の伝統にはありません。海（障子）に向けての視線を誘導するための要素とし、タウトの意思が伝わります。た。



和風客間上段には「帳場」と言われる半畳の張り出しが設けられ、その側面には開閉式の書棚が設けられるなど面白い工夫がなされています。この横からは和室5畳半の部屋に通じています。日向邸にはいわゆる廊下がないと同時に、タウトの強い意図から2つの高さの違いから出来上がっています。それにより、主要各室を自由に使えるようにしました。





ベランダ・和室 5.5 畳

ベランダの床は、7寸5分角の瓦で四半敷（45度に傾かせて敷く形式）となっています。開口部は、西側に3枚、南側に1枚、木製ガラリ戸を蔭戸の形式で用いられています。この蔭戸の羽は可動となっており、珍しいつくりです。

天井は、大和天井で分厚い板を黒塗し上下に重ねて厚さを出すことで力強く仕上げたものです。一方、壁面は白の漆喰塗で、北側に洗面所への入口および押入の杉戸が設けられています。

床の間の北側、上段に設けられた和室5.5畳は、西側に大きな窓を有し、付け書院が設けられています。4畳半に1畳の踏み込みの間です。ベランダ側からの出入りもあり通り抜けられます。



ベランダ



和室 5.5 畳



ベランダ



和室 5.5 畳

旧日向家熱海別邸

く
タウトの日記でたどるく



『タウトの日記』 原文



篠田英雄 訳『日本 タウトの日記』1975(昭和 50)年 岩波書店刊 より抜粋



タウトの日記・
旧日向別邸



タウトの日記・
上多賀



日向利兵衛との出会い

4.5

1935 東京にて

外務省の柳沢(健)氏は、私に来訪を求め、私を日向(利兵衛)氏に引き合わせてくれた。日向氏はもう60歳を超えた老紳士で現在は自適の境涯にあり、また日本のアマルフィとも言うべき熱海に別荘をもっている。同氏は、この別荘を増築するについて、その設計を私に依頼したいから、1週間ばかり熱海にご滞在願いたいと言うのである。



日向 利兵衛 アジア貿易商

1874(明治7)年、大阪の実業家「唐木屋」の一人息子として誕生。第三高等学校、東京商業学校(現一橋大学)を卒業し、同年「唐木屋」を相続。美術、建築に造詣が深く、語学力と幅広い人脈を生かして貿易関係で活躍。「唐木屋」は、紫檀、黒檀、鉄刀木などの銘木を輸入し、家具を製造販売。高級家具、茶室や数奇屋造りの飾り棚や置家具など、工芸製の高い製品を扱った。また、当時重要な輸出品だったマッチの原料であるリンの輸入でアジア貿易に足がかりをつけ、貿易商として財をなした。熱海別邸完成から3年後、1939(昭和14)年9月 65歳で逝去。



柳沢健



上屋のこと

4.16

1935 熱海にて

日向氏に誘われて、熱海にある同氏の別荘に赴き、とりわけ夫人から手篤いもてなしを受けた。この老夫妻は、広潤な海上の眺めを恣(ほしいま)まにする新邸で安穩な余生を送っている。建物は、なかなか趣があり、大体においてよくできている。設計はすべて日向氏の方針に従ったものらしい。

温泉の湯を引いて暖房に使用するような新工夫もあった。間取の具合もよく考慮してあり、施工も上乘である。何もかもというわけにはいかないが、日向氏と私とは趣味の点で非常によく一致するところがあるので、今度の増築計画は順調に運びそうな気がする。



渡辺 仁 建築家

1887(明治20)年 東京で生まれる。東京帝国大学建築学科を卒業。
鉄道院、逓信省に勤務。

1920(大正9)年 独立し、渡辺仁建築工務所開設。

主要作品には、服部時計店、ホテルニューグランド、東京国立博物館、
第一生命相互館などがある。

旧日向家熱海別邸(上屋)は、渡辺仁設計による
数少ない現存住宅として貴重である。



渡辺仁



「ミラテス」電気スタンド

現在の日向邸は、海に面した斜崖にコンクリート構造の張出しを設け、その上部を庭園にしている。この庭園の下を地下室にしてここに居間と社交室とを建築したいというのが日向氏の希望である。

日向氏は「ミラテス」で電気スタンドを買ってから私の仕事に興味を持ち、私に会いたがっていた。



「ミラテス」で購入した
電気スタンド

透明な湯を始終いっぱいに湛えた大浴室では、いつでも勝手に入浴ができる。私達に当てられた縁側付の客間は、明るい立派な造りの日本座敷である。この頃では、寝台よりも畳の上に寝る方がよくなった。



旧日向家別邸
建築ガイド
(全体の建築はこちら)



旧日向別邸滞在

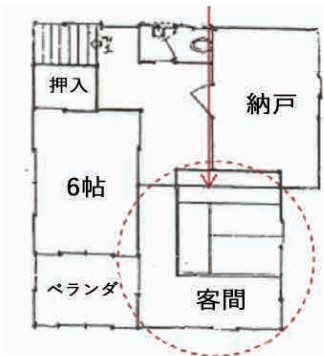
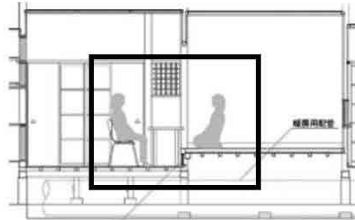
4.17

1935 熱海にて

日向邸には、主人夫妻は一段と高い畳敷きの座に座り、私達は椅子にかけて相対するという風変った趣向の部屋がある。

日向氏が私に望んでいるものは、夏になっても山へ行く必要のない「夏向き」の部屋である。つまり涼しくて落ち着いていてしかも「味」のある建築なのだ。

最初のスケッチはもうできている。日向氏はこの構想に満足してくれるだろうか。



1935年4月16日
タウトはこの2階の3室を使って滞在した。





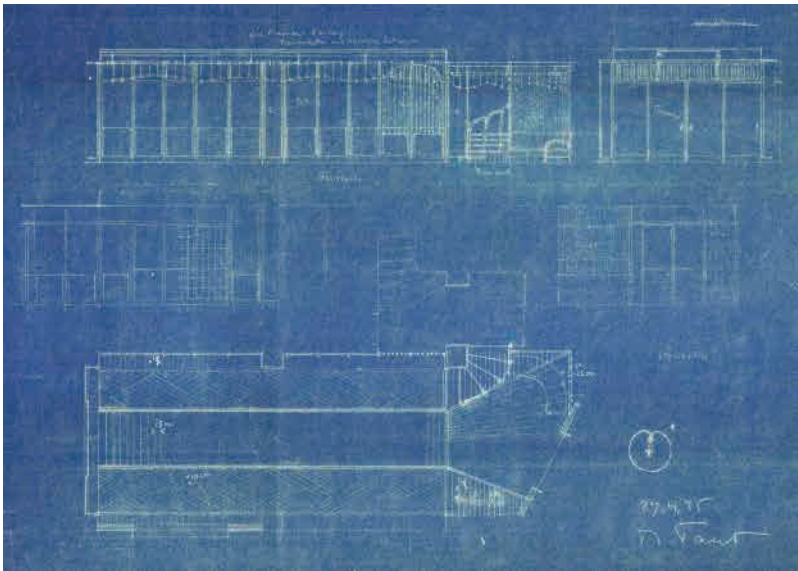
スケッチ

4.23

1935 東京にて

日向氏を訪ね、別邸の全体的な構想を描いたスケッチを示して、その承認を得た。早速仕事に取りかかることになる。だが、最もすぐれたものを作るとなると、この仕事は半分或はそれ以上も私の「奉仕」になり兼ねない。

私の今度の仕事も決して容易でない。第一に私は日本の材料に精通していない。第二に私には練達な協力者がいないからだ。しかし建築主の日向氏は趣味の人だから、細部に至るまで丹念に仕上げるのは、建築家としてやはり甲斐のある仕事だと思う。



*ブルーノ・タウト直筆の「社交室の天井伏図と北及び西展開図」のエスキース。天井を描いた図面には、平面図が同時に表現され、タウトが空間的イメージの中で構想していた事が伺われる。青図の上下の図面は現状図である。スケッチ段階のものが、アルコーブの天井を除きほぼ忠実に実施されている。(青図提供：NTTファシリティーズ)



タウト・吉田日向邸の図面



協力者

5.7

1935 東京にて

このところ3日ばかりは、朝から晩まで日向邸の図面(20分の1のものど現寸のもの)にかかり切りであった。また若い協力者達に私の意のあるところを正しく理解してもらう為に、別に数枚のスケッチを描いた。

5.8

1935 東京にて

日向邸の図面を持って吉田氏のお宅を訪ねた。奥さんや息子さんにもお会いした。夥しい蔵書のある書齋でご飯をご馳走になる。そうしているうちに、吉田氏があらかじめ打合わせておいてくれた5人の建築家が来た。そのうちの2人がこの前の日曜日に熱海へ行って、日向邸の建築現場を正確に測量してくれたのである。この若い建築家達が、今度の仕事の協力者で、主として建築図面を描いてくれることになっている。



東京中央郵便局



右から2人目が吉田鐵郎

吉田 鐵郎 建築家

1894(明治27)年東京で生まれる。東京帝国大学建築学科を卒業。鉄道院、通信省に勤務。東京中央郵便局1931(昭和6)年や大阪中央郵便局1939(昭和14)年などの日本近代建築の名作を残した。通信省の建築家として知られている。ブルーノ・タウトが来日した際、桂離宮など各地を案内した。タウトは吉田の設計した東京中央郵便局を、モダニズムの傑作と讃えた。1956(昭和31)年 逝去。



吉田鐵郎



6.10

1935 東京にて

日向氏が東京の本邸を見せてくれた。なかなか気持ちのよい造りである。吉田（鐵郎）氏の紹介で大工の佐々木氏が熱海の日向邸の増築を請負うことになったので、同氏にも会っている話合った。

日向氏は、私達をひと夏、海辺で過ごさせようというので、熱海近くの漁村に小家屋を借りてくれた。こうしておけば暑い時分に、建築と海水浴とを適当に按配できるだろうという親切な配慮からである。





6.20

1935 東京にて

吉田(鐵郎)氏のところでは、若い建築家達が相変らず日向邸の図面を描いている。佐々木氏も居合わせて、建築費の見積りをしていた。



佐々木 嘉平 社寺建築家

富山県東砺波郡福野町(現在の南砺市福野)で代々宮大工であった佐々木家に生まれる。全国各地で数々の国宝や重要文化財の修復・保存に携わり、1981(昭和46)年黄綬褒章を受章。

ブルーノ・タウトに請われ、日本的な様式に関して工事監理者として様々な助言を行った。



佐々木嘉平



7.3

1935 東京にて

今日は日向氏に会う。熱海日向邸の増築部分は、まったく人に「見せるため」のものであり、夏になっても実際にここへ住むわけではない。同氏は上多賀海岸に土地を持っており、別に買い入れた古い農家をそこへ移築させているのである。老人というものは、こんなことをして暇を潰しているのだ！

8.31

1935 熱海にて

熱海、日向邸の増築は、設計通りの板材が市場に無いというので、幾個所か模様替えをしなければならなかった。大工の佐々木さんは、私の設計した床の間では、どんな形の掛物にも向くというわけにいかない、と言ったそうだ。



タウトの床の間(イメージ画像)



一般的な床の間(イメージ画像)

* 日本間の作りとしては、落とし掛けを少し上げることで掛物を見えやすくするのが一般的です。また、神聖なる床の間には畳の縁を差すことはしないことになっています。(床刺し)



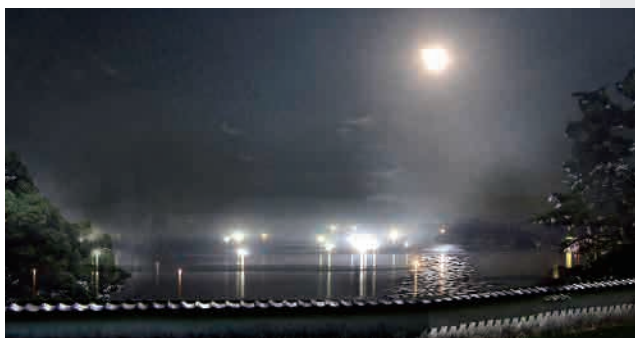
屋上庭園のこと

9.8

1935 熱海にて

夕方熱海へ行く。日向氏が自邸で私を招いてくれたのである。明るい月影が海面にきらきら光っている。海上には樹脂の篝火をもやした夥しい漁船。芝生を敷詰めた「架空」庭園の向こうには海原が無限に広がっている。

夜遅くバスで帰る。途中の「リヴィエラ」街道がすばらしく美しい、多賀村で降りてしまうのが惜しいくらいであった。



イメージ画像



熱海 多賀の風景



イタリア リビエラの風景



和風客間・洋風客間について

11.17

1935 熱海にて

熱海へ日向邸の増築現場を見に行く。

日向氏は、建築現場へは一度も降りてこない。建築に関しては、すべて私が決定することになっているのである。工事の進捗は頗る緩慢だが、仕事は非常に真面目で、まず上乘の出来栄である。日本間の部分の用材は、色の調子が品よく落着いている。また私がここで製図したモダンな洋間のほうも、見事な釣合をもつようになるだろう。全体として、特に際立たせた個所はひとつもなく、すべて優雅な趣味の人に向くような建築である。





12.8

1935 熱海にて

吉田（鐵郎）氏と熱海の建築現場を見に行く。進行は相変わらず緩慢だが、仕事からは気持ちのよい印象を受けた。吉田氏も建築の質のすぐれていることを確認してくれたので、大変心強かった。



奥から
和風客間 洋風客間 社交室



久かたぶりの建築現場

4.12

1936 熱海にて

上野伊三郎君といっしょに熱海へ行き、日向邸の建築現場を見る。色彩や用材の処理について遺憾な点もいくつかあり、その為に高雅な趣味がそなわれる個所は是非ともやりなおさねばならないが、しかしこうして見ると、世界的な好趣味というものは、時世に媚びる日本主義よりも遥かに重厚であることがよく判る。



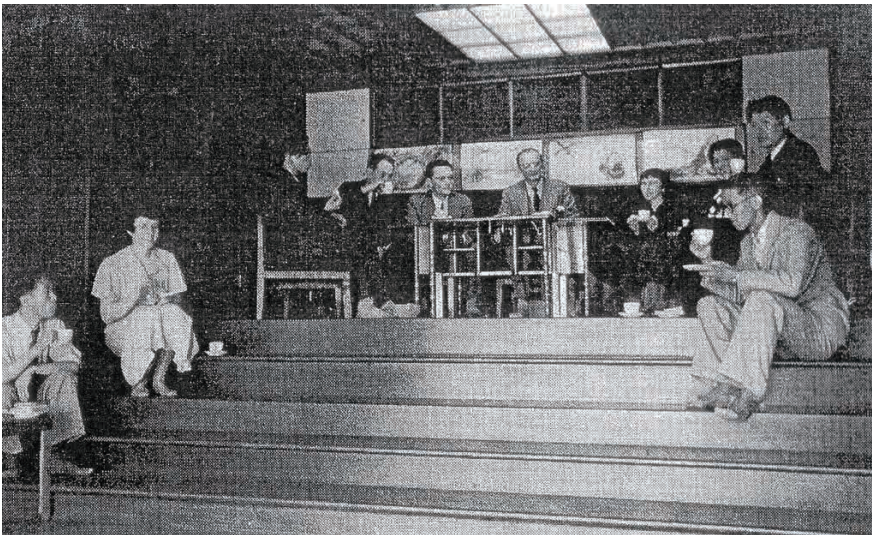
各室の諧調を見る
奥から 和風客間 洋風客間 社交室

一応完成

9.20

1936 熱海にて

吉田、水原、島田、高村、ブブノワ夫妻、山野諸氏と連れ立って、私が増築した日向邸を見に熱海へ行った。かつてベルリンでは、新築家屋が落成すると友人知己に集まってもらって批評を求めたものだが、今日の集まりはあれから5年来のことである。私も、一応完成したと言えるこの建築と内部の照明や主要な家具などを、自分の眼で見るのは今度が初めてなので、実際にはどんなものかと、自分でも好奇心をもち、また少からず興奮もしたが、いま私の仕事が、細部にいたるまで成功しているのを見て、非常に満足した。もちろん、不手際と思われる些細な個所や、また必ずしも適切とは言えない間接照明などは、満足のうちに入らない。



中央にタウトとエリカ 他にブブノワ夫妻 吉田鐵郎 水原徳言 高村鍵三 島田巽夫妻
(1936年9月20日 島田巽氏提供)

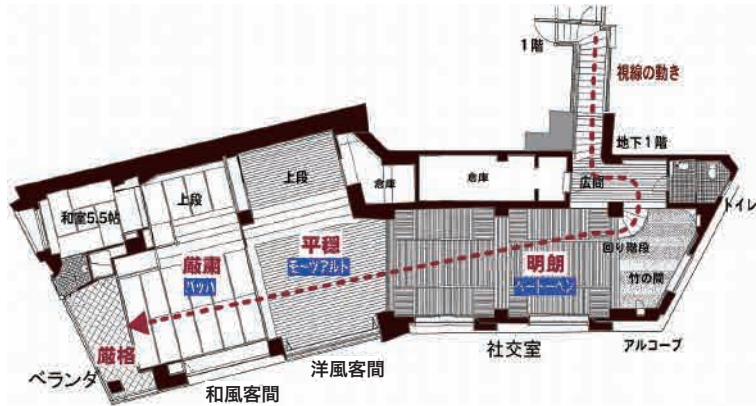


建築の成功

9.20

1936 熱海にて

しかし全体として明快厳密で、ピンポン室（或は舞踏室）、洋風のモダンな居間、日本座敷及び日本風のヴェランダを、一列に並べた配置は、すぐれた諸調を示している。いささか古めかしい言い方をすれば、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハだ。私はこの建築を、釣合についてはもとより、細部、材料及び色彩にいたるまで、成功したと信じている。写真でこれを再現することは不可能である。元来写真に撮影するための建築ではないからだ。



■ シークエンス ■

タウトが実施した躯体の変更は、個性的にデザインされた各室となり、階段→広間→廻り階段→アルコーブを望みながらの社交室、洋風客間、和風客間、ベランダへのドラマチックな誘導でした。地下室で傾斜地であることから、右・山側は壁のため、上段をつくり変化をつけ、左・海側は掃き出し窓とし、外部へと開放・一体化を図り、豊かな眺望を楽しめるようにしました。



多様な視界の確保 日本の尺度



1年半前に日向氏から建築を依頼された時には、まだ日本間についてやや危惧の念を懐いていた。私はいつも日本の人達に、桂離宮と小堀遠州とを建築及び建築家の模範として示してきた。しかし当時私には、日本の古典建築の特殊な細部に関する研究が十分でなかった。これについて私は吉田（鐵郎）氏に教えられるところが多であった。両人は相共に研究を進め、不明な諸点を審らかにした。だが吉田氏は一切の決定を私に任せた。

■ 多様な視界の確保 ■

タウトは、傾斜地が生むわずか1m弱の段差利用と窓枠のデザインを施し、階段状の家具をつくり、掃き出し窓の枠と呼応させ、様々な視界を楽しむ効果を狙いました。

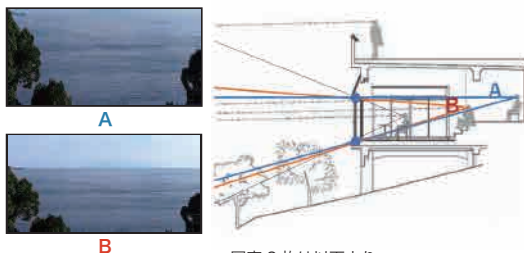
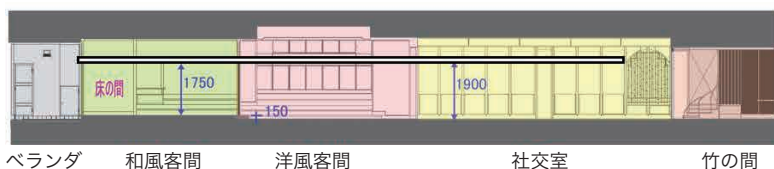


写真2枚は以下より
<https://mirutake.sakura.ne.jp/2018/68hyugatei/hyugatei2.htm>

■ 日本の尺度 ■

タウトは、洋室より150mm上がった日本間の内法を1750mmとし、床の間の落し掛けの高さも無視し四方に鴨居を回しました。そしてその連続が1900mmとなって洋室、ピンポン室へととなり、異なった4室を穏やかに共存する要素としました。



階段状家具



日本の尺度



水原徳言

水原氏は、「こういう建築は、日本の何處にもありません」と言ったが、私も全くその通りだと思う。確かに、日本に未だかつてなかった「新しいもの」だ。だが、日本の古典建築を範としたのは釣合だけである。ほかには一物と雖も模倣はない。すべて単純を旨とし、金具類にしてもわざと工業建築用の雛型から選び、従ってロマンティックな趣はひとつもない。



*水原徳言は、タウトの唯一の弟子と言われ、タウトの身边で常に支援した人物。
2009（平成21）年 98歳で逝去。





離日

10.10

1936 東京にて

井上(房一郎)氏の肝煎で、同氏のほか吉田(鐵郎)、蔵田(周忠)、齋藤(寅郎)の諸氏が幹事役となって、盛大な送別会を催してくれた。会場に当たった赤坂幸楽の2階には、50人ばかりの知友が集まった。最初に上野(伊三郎)君が立ち、「タウト氏のすぐれた才能が、日本で十分に発揮できなかったのはまことに遺憾である」と述べた。

宴が終り、大方の客が帰ったあとでも、名残を惜しむ人達は階下の洋間に集まってお茶を飲んだ。そこで熱海の日向邸の建築記事の載っている『朝日グラフ』が頒布された。篠田(英雄)氏が、『桂のアルバム』は複製することができるかも知れないと言ってくれたから、それは東京へ残すことにした。



Taut, Buruno: Gedanken nach dem Besuch in Katsura. Kioyo, Mai 1934. Tokyo. Iwanami Veriag.1981.



桂離宮



*カントの言葉をタウトが揮毫したもの

自信をもった日向邸の完成でしたが、当時の建築界での評判は芳しくなく批判的でした。タウトは「私のこの建築は後50年から100年後に理解されるだろう」という一文を残しています。

9月11日トルコより招聘の来信があり、タウトは日本の「重苦しい空気はやりきれない」と離日を決意し、旧日向別邸の完成後間もなくの10月15日にトルコへと旅立っていきました。

竣工後の 旧日向家熱海別邸

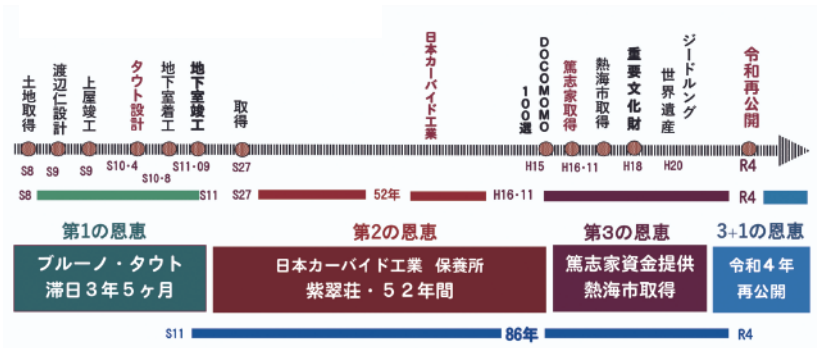
旧日向家熱海別邸は、一九三六（昭和十一）年竣工から八十八年の年月の間、奇跡とも思われる三つの恩恵の下、令和の大改装を終え再び蘇りました。この期間の様々な過程、そしてドイツとの交流、市民活動を振り返ります。



3+1 の恩恵

旧日向家熱海別邸は、様々な恩恵を得て維持保存されてきました。
 熱海ブルーノ・タウト連盟はこれを「3+1の恩恵」と称し、広報活動をしています。
 その恩恵の第一は、熱海にタウト唯一の建築遺産を残してくれたこと。第二は、日本カーバイド工業により、保養所として52年間極めて良好に保存されたこと。第三は、2001年売却の話が出た時、東京在住の篤志家により資金提供がなされ、2004年に熱海市が所有でき、2006年重要文化財に指定され公開されたこと。
 +1(第四)は、今回漏水・耐震などから2019(令和元)年5月～2021(令和3)年9月にかけて3億円の改修工事が挙行され、熱海伊豆山の土石流災害という事態を乗り越え、再公開されたことです。

■ 旧日向家熱海別邸3+1の恩恵 ■



3+1の恩恵

docomomo100選 重要文化財指定



■ docomomo100選 ■ 2003年

2003（平成15）年9月18日社団法人日本建築学会及び
DOCOMOMO Japanによって旧日向家熱海別邸は、
歴史的価値が報告されました。選定理由は次の通りです。

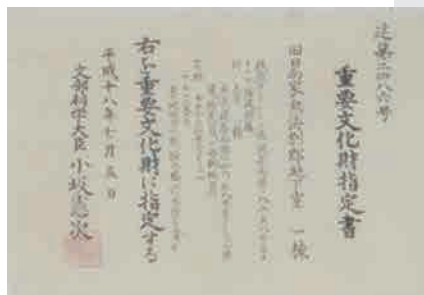
1. 装飾を用いるのではなく線や面の構成による美学が構成されている。
2. 技術の成果がデザインに反映されている。
3. 社会改革的な思想が見られる。
4. 環境構成（広場や建築群の構成）という観点でデザインされている。



DOCOMOMO JAPAN選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築は、
DOCOMOMO Japanが現存する近代建築として選定した建築です。
2023年(令和5年)8月時点で、280件の建築が選定されています。

■ 重要文化財指定 ■ 建第2486号 2006(平成18)年7月5日

敷地・宅地	702.38㎡
指定日	平成18(2006)年7月5日
指定基準	意匠的に優秀なもの
指定	・旧日向家熱海別邸地下室 1棟 鉄筋コンクリート造 建築面積 185.58㎡ 階段付属 附(ついたり)
	・上屋 1棟 木造 建築面積 146.38㎡ 二階建て



docomomo
100選の今



重要文化財
指定基準
附けたり指定



文化財保護法



令和改修工事

事業者	熱海市
期間	2018(平成30)年11月～2021(令和3)年12月
事業費	321,146,000円
平成30・31年	(84,108,000円)
設計	公財法人 文化財建造物保存技術協会
施工	清水建設株式会社 静岡営業所
内容	1. 地下室漏水防止目的の防水工事 躯体補修工事 2. 地下室内装の保存修理工事 3. 上屋の耐震補強工事 4. その他、重要文化財の保存工事



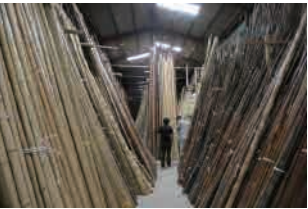
『旧日向別邸保存活用計画』



建物滑り止め工事



令和改修工事
熱海市 HP からの写真



シュパイデル博士から寄贈された
タウト設計の造作ベンチ (破線で囲まれた部分)



「緑の党」に引き継がれた タウトの理念

1989年ベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツの垣根が取り払われ、緑の党が誕生しました。タウトがドイツで活躍してすでに100年がたち、1980年代に入り、にわかに関心が高まりつつある時代でのことでした。

その党の結成の中心メンバーであったオットー・シリー氏はブルーノ・タウトの環境に対する考えに強く憧憬した人物です。

オットー氏はタウトの孫であるクリスチーネと結婚しました。ふたりの娘のジェニー・シリーは、現在女優として活躍しています。



タウトの孫であるクリスチーネ



ジェニー・シリー
(ひ孫・女優)



オットー・シリー
(元・緑の党)

当会名誉顧問の田中辰明先生は、たびたびドイツを訪れては、情報を伝達交換して頂いています。



ベルリン芸術アカデミーブルーノ・タウト担当
Petra Albrecht



[タウトの家族系](#)



[ドイツとの交流](#)



ドイツ大使 来熱

熱海ブルーノ・タウト連盟では、2022(令和4)年10月14日 Clemens von Goetze(クレメンス・フォン・ゲッツェ)ドイツ大使ご一行をお迎えました。その際、文化部の責任者であるDr. Söhnke Grothusen一等書記官もご同行されました。熱海市・斉藤市長、熱海商工会議所・杉山専務、熱海市観光協会・西島専務、熱海温泉ホテル旅館協同組合・森田会長と面会し、会員との交流を行いました。

旧日向家熱海別邸の見学、多賀そばでの昼食、MOA美術館鑑賞、そしてお茶・お花のセレモニーをご体験いただきました。



[ドイツ大使夫妻の訪問](#)



[訪問記録動画](#)

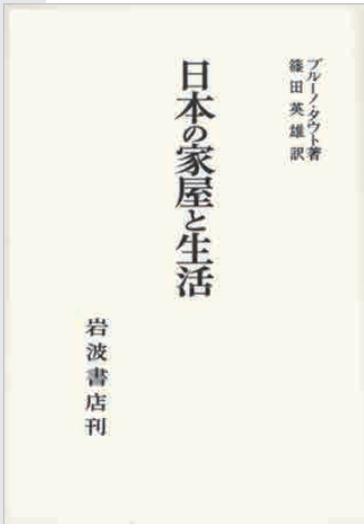
資料



タウトの著書 『日本の家屋と生活』

タウトは3年5カ月の在日間に、多くを著書を書き上げました。1935(昭和10)年から1936(昭和11)年、旧日向別邸の為に熱海を訪れた他、エリカの提言で熱海上多賀を訪れ、休養と同時に「日本の家屋と生活」を書き上げました。

本書は、1937(昭和12)年、岩波書店から刊行されました。



目次	著者序文
	I 対照
	II 新生活
	III 夏
	IV 太陽と炭火
	V 農民と漁民
	VI 諸神と半神達
	VII 庶民
	VIII 大工
	IX 隣人
	X 網の糸
	XI 転回点
	XII 永遠なるもの
付録	
あとがき	



『日本の家屋と生活』

タウトの著書 『日本美の再発見』



タウトの論文二篇と日記二篇が、『日本美の再発見』(訳：篠田英雄)にまとめられています。1939年の6月、タウトがイスタンブールで亡くなってからちょうど半年後でした。

タウトによると、日本文化の本質は、簡潔、明確、清純にある。その典型例が伊勢神宮(外宮)や桂離宮であり、そこに見出される本質は、日本各地に根づく伝統的な日本家屋や工芸品、さらには一般庶民の生活様式の中に生き続けている。

そして、日本文化のこうした特質は時代を超えて現代的であり続け、それを追求することこそが、日本が世界に貢献できる一番の道であると、彼は記しています。

原著は、1939(昭和14)年 岩波新書より刊行され、増版を続けています。

泣きたくなる様な美しさ、永遠の美、ここにあり。
われ日本文化を愛す。
それは実に涙ぐましいまで美しい。

桂離宮を訪れた時の感想をタウトが記している



『日本美の再発見』



活動の記録

- 総合**
- 熱海ブルーノ・タウト連盟 HP
 - タウト塾@熱海 2021年度 年間計画表
 - タウト塾@熱海 2022年度 年間計画表

- 展示会**
- 2020-10 ギャラリー藍花展
 - 2020-12 ホテルニューさがみや展
 - 2021-04 ホテルミクラス展
 - 2021-10 ブルーノ・タウトの軌跡展
 - 2021-02 三島信用金庫ストリートギャラリー「旧日向家熱海別邸」展

- 講演会**
- 2021-05 東山文化
 - 2021-06 旧日向別邸
 - 2021-10 ブルーノ・タウトの軌跡展
 - 2021-10 文化財保護の歴史と熱海市の特色
 - 2021-11 コンドル、ライト、タウト設計の邸宅を巡る
 - 2021-12 熱海温泉の歴史と観光
 - 2021-12 熱海市の観光施策
 - 2022-02 歴史的建築を活用したまちづくり
 - 2022-08 地球人・ブルーノタウト
 - 2023-04 BRUNO TAUT — 青雲の志と現代 —
レーナー教授、シュパイデル博士



- ポスター
見学会**
- 2020-03 四季のポスター 4枚
 - 2021-11 自由学園と安田邸見学
 - 2022-02 春日町古民家再生現地見学
 - 2022-05 箱根美術館見学
 - 2022-09 稲村ハウス(旧テーテンス邸)見学 (設計:前川国男)
 - 2022-12 旧吉田邸見学
 - 2023-10 高崎達磨寺・洗心亭見学会調査研究
 - 2021-11 タウトの上多賀での滞在場所調査



- 招待**
- 2022-10 ドイツ連邦共和国大使夫妻 旧日向別邸へ



総合



展示会



講演会



ポスター
見学会



-
- 広報記事**
- 2021-10 日独協会
「日独交流・文化の架け橋～旧日向家熱海別邸～」(PDF)
 - 2021-11～熱海新聞・伊豆新聞「伊豆路」6回(会長:矢崎英夫 寄稿)
 - 2022-12 日独協会
「タウトが熱海に残した小宇宙―旧日向家熱海別邸―」
 - 2021-01 熱海市観光文化施設(熱海市10施設便覧)
-

- 商品開発**
- 2022-10 クリアファイル(2種)
-

協力

- ・外部連携
 - [日本バウハウス協会](#)
 - [公益財団法人日独協会](#)
 - [ぐんま日独協会](#)
 - [NPO 法人文化日独コミュニティ](#)
 - ・連盟関係者
 - ヴォルフガング・レーナート博士
 - マンフレッド・シュパイデル教授
 - 田中辰明
 - 西川新八郎
 - 松本寅一
-

- 参考資料**
- 熱海紹介あたまロマン紀行 熱海市ホテル旅館協同組合連合会
 - 『熱海温泉誌』2017(平成29)年 熱海市刊
 - 『日本 タウトの日記』
 - 今井写真館(熱海歴史写真)
 - [熱海市役所HP](#)
 - [旧日向別邸保存会ブログ](#)

- は『熱海温泉誌』より引用しています。
- ■ は熱海市役所HPより引用しています。

本書は、熱海ブルーノ・タウト連盟会員の3年間の会員活動・研究のまとめとして制作しております。



招待



広告記事



協力



参考資料



おわりに

この度は熱海ブルーノ・タウト連盟の一員として、そして私たちの活動を支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

ナチス政権を逃れて来日したブルーノ・タウトの日本における唯一の作品である熱海の日向別邸。その貴重な遺産とタウトの偉大な業績を忘れることなく、我々は熱海ブルーノ・タウト連盟を結成しました。これまでの活動を通じて、ドイツのブルーノ・タウト研究の第一人者であるProf. Manfred Speidel氏やDr. Wolfgang Lehnert氏をお招きし、講演会を開催するなど、様々な成果を上げることができました。

今回の解散は、決して終わりではありません。むしろ、新たな段階の始まりであります。解散に際し、矢崎英夫会長を中心に、熱海とブルーノ・タウトに関する本をまとめることができました。この記念すべき本が、皆様のお手元に届けば幸いです。

最後に、熱海ブルーノ・タウト連盟の一員として、そしてブルーノ・タウトの偉大な遺産を守り育てる使命を共有してくださった会員の皆様に、心よりの感謝を捧げます。今後もタウトの精神を胸に、我々の活動が続いていくことを願ってやみません。

誠にありがとうございました。

2024(令和6)年3月

お茶の水女子大学 名誉教授 田中 辰明

Ich liebe die japanische kultur.
B.Taut

我、日本文化を愛す。B.タウト

泉都熱海とブルーノ・タウト

発行：2024(令和6)年3月14日

編集：熱海ブルーノ・タウト連盟

連絡先：080-3217-3297(矢崎英夫)

発売：非売品